

在日イスラム系外国人の避難所としてのモスクの利用可能性の検討

代表 小谷 仁務（東京大学大学院工学系研究科総合研究機構 助教）

委員 山路 永司（東京大学大学院新領域研究科国際協力学専攻 名誉教授）

〔研究報告要旨〕

災害時の避難所生活では外国人の宗教に起因する問題が指摘されており、特に、マイノリティであるイスラム系外国人（在日ムスリム）のための礼拝スペースや食事（ハラール食）の提供が課題となっている。そこで、本研究は、在日ムスリムが日頃から利用する礼拝所「モスク」を自主的な避難所として利用することを提案し、その利用可能性を検討した。モスクには、礼拝スペースを含めた広い空間が存在すると共に、週末の礼拝後に食事が提供されることもあり、上記の問題を解消するポテンシャルをもちうるためである。本研究では、在日ムスリムが多く居住する群馬県伊勢崎市の二つのモスク（伊勢崎モスクと境町モスク）を対象に調査を行い、モスクが避難所として有効に機能する設備の有無や建物環境を明らかにした。さらに、避難者の収容可能人数や食事の提供可能人数、モスク管理者の協力可能性を示した。具体的な結果として、両モスクともトレイやシャワー室などが備わり、伊勢崎モスクでは 60 人強、境町モスクでは 80 人弱の避難者を受け入れられるスペースが存在することがわかった。モスク管理者は避難所利用に前向きな意向を示しており、モスクが多くの避難者の一時的な滞在・宿泊可能な施設として機能することが示唆された。一方、両モスクとも、100 人規模の食事を準備できるキッチンやそのための食器類が備わっていたものの、大量の食料が常には買い置きされているわけではなかった。ただし、近隣のレストランやハラールショップからの迅速な食料の確保は難しくない状況であったため、食料提供の場としてもモスクが機能する可能性も示唆された。最後に、避難所として活用していくために今後検討されるべき事項についても議論した。上記の結果は、今後、モスクの避難所利用を精緻に検討していくための基礎的知見となる。

なお、上記の成果を 2 件の国内学会、1 件の国際学会で発表すると共に、英文原稿を執筆・公開し（<https://doi.org/10.21203/rs.3.rs-203661/v1>）、知見の普及に努めた。